

江戸時代の土木遺産「恋ヶ窪村分水」が市の重要史跡になりました

現在の国分寺市域は、江戸時代の旧10ヶ村が明治22年に合併して、近代の国分寺村が誕生したことで形成されました。このうち、野川源流域の湧水地を囲む国分寺村と恋ヶ窪村以外の8ヶ村は、享保年間(1716～36)以降に開拓された新田村です。古くから水の確保に苦労してきた武蔵野で新田開発が進んだ背景には、江戸市中への給水を目的として承応3(1654)年頃に開通した玉川上水の恩恵が大きいといえますが、市内では南野中新田分水(後の砂川用水)をはじめとする幾つかの分水が巡っています。このようななかで西恋ヶ窪一丁目には、現在も大きな空堀が約100mの長さで残されています。通称、「恋ヶ窪用水」と呼ばれる周辺には樹林地が広がり、このほど市では緑地整備工事に伴い文化財の調査を行いました。

この用水は、国分寺村外二ヶ村組合分水と呼ばれ、国分寺村・恋ヶ窪村と貫井村(今の小金井市)の3つの村が、明暦3(1657)年に田で使う用水として、玉川上水から引水することを幕府に願い出て開削したものです。これによって恋ヶ窪村の水田は、正保年間(1644～47)に3斗9升2合であった石高が、延宝6(1678)年には8斗8升7合3勺とほぼ倍増するに至りました。なお、明暦3年には、砂川分水(現立川市)、小川分水(現小平市)も飲水用として開削され、これら3つの分水は、承応4年に通水した野火止用水に次いで古い玉川上水の分水です。

当初の分水口は、小川新田地先(西武国分寺線鷹の台駅南方)にありましたが(図1のA)、明治3年に玉川上水の分水口が統廃合されると砂川用水から水を引くようになりました(同図のB)。また、府中街道の恋ヶ窪五差路は「堀分」という地名で以前は呼ばれ、この辺りで貫井村・国分寺村・恋ヶ窪村分水の3本に枝分かれしました(同図のC)。

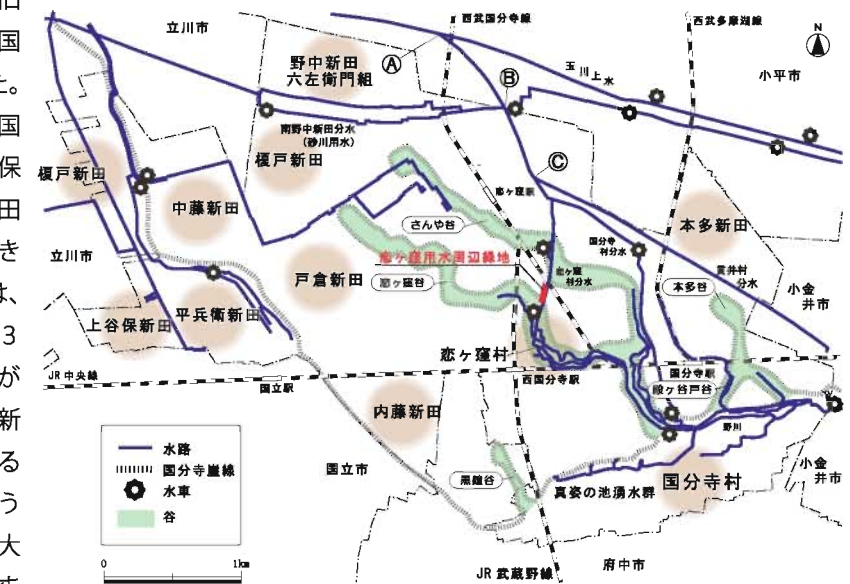


図1 市内の用水と恋ヶ窪村分水(恋ヶ窪用水周辺緑地)位置図

平成29年6月に発掘調査を行ったところ、堀の断面は薬研状で、堀幅は上面で約6～9m、深さは5.2～5.5mを測り、堀底は北から南に向かって低く傾斜している様子が判りました。この大きさは、玉川上水の本流にも匹敵する規模ですが、実際に流れていた水は堀底から50cm位の深さで、堀の規模が大きい割に水量自体は少なかった印象があります。

それでは何故、これほどまでに堀を深くする必要があったのでしょうか。それは、分水口から南方の恋ヶ窪村まで水を落とすのに、「さんや谷」と「恋ヶ窪谷」と呼ばれる2つの谷に挟まれた標高70mほどの小高い丘を越えなければならず、この樹林地一帯が「丘」に相当する地形であるためと思われます。

恋ヶ窪村分水は、後世にコンクリート護岸されることもなく、江戸時代の様子が今でも良好に残っているため、開削後360年目にあたる平成29年に国分寺市の史跡として指定されました。

今年7月には緑地整備工事も終わり、現地には散策路・ベンチ・案内板等を設置していますので、ぜひ散歩ついでに市内に残る貴重な江戸時代の土木遺産をご覧ください。(依田亮一)

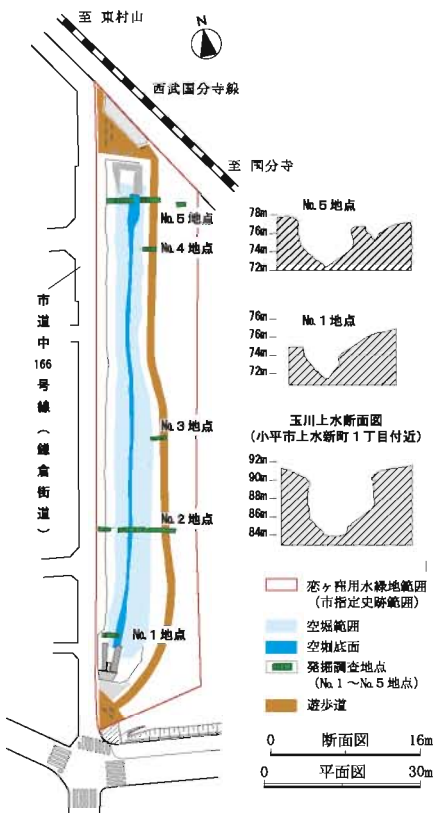


図2 恋ヶ窪村分水の堀の規模と断面図



恋ヶ窪用水周辺緑地入口